

現代エスノグラフィーの理論と実践(1)

——フィールドとしての宗教と調査をめぐるポリティクス——

平野直子（早稲田大学）

1 目的

宗教社会学の分野では 2000 年代半ば、川又俊則らによるライフヒストリー・アプローチ（川又 2006）の導入や、芳賀学らによる「自己物語」概念を踏まえたエスノグラフィー（芳賀・菊池 2006）など、信者たちの意味世界の理解を目指すさまざまな方法の成果が発表された。これらはいずれも調査の場が研究者と調査協力者によって共同で構築されるものであるという認識を持ち、フィールド調査をめぐる新たな議論のトレンドを明確に意識していた。本報告では、これらの宗教社会学における試みとエスノグラフィーに関する近年の議論との関係を明らかにするとともに、そこでは主要な論点として取り扱われなかった、宗教（もしくはその周辺的な事象）をフィールドとする際の調査者-調査協力者間関係の問題について検討することを目的とする。

2 方法

上述のように、まずは近年のエスノグラフィーに関する議論が、宗教社会学のフィールド調査とその成果にどのように影響を与えたかを整理する。さらに、そこでは注目されなかった論点のうち特に重要と思われる、「宗教というフィールドで調査者と調査協力者はどのような関係にあるか」という問題について、調査方法論以外の文脈でなされてきた指摘や、報告者の代替療法実践者に関する調査で得られたフィールド資料などを参照しながら検討する。

3 結果

上の検討によって明らかになるのは、宗教のフィールドで露わになりやすい、調査者と調査協力者のあいだで生じるポリティカルな状況である。近年のエスノグラフィーに関する議論の多くは、調査者の調査協力者に対する権力性、あるいは調査が調査協力者を収奪するような状況が生じる危険を強調してきたが、宗教のフィールドではその逆のこと、つまり調査協力者が調査から利益を得ることに関して、意識的かつ積極的であるような状況——たとえば、大学の「権威ある」研究者によって調査されていることをアピールする調査協力者など——に遭遇することがある。研究者と、調査やその成果物がどのように社会的な効果を持つのかということに意識的な調査協力者は、フィールドをどのように描き、発信するのかという点で競合することになる。そこに生じるのは、書き込むことの難しい、両者の間の一種の「駆け引き」である。

4 結論

研究者と調査協力者の関係性に関するこうした問いは、一方では 1995 年のオウム真理教事件以降、宗教研究者に対して突き付けられた問いとつながる。他方では、調査が調査協力者と調査者の共同の構築物である以上、必然的に生ずる問題として、現代のフィールド調査一般の議論へとつながっていくと考える。

文献

川又俊則・寺田喜朗・武井順介編，2006，『ライフヒストリーの宗教社会学』ハーベスト社。
芳賀学・菊池裕生，2006，『仏のまなざし、読みかえられる自己——回心のマイクロ社会学』，ハーベスト社。